

震災で知った専大生のパワー

被災地での活動

継続した「ふれあい傾聴活動」

ジャーナリズムを学ぶ学生たちが、3・11東日本大震災の被災地でのボランティア活動や震災・原発報道の調査・分析を行った。活動を通じて何を学び、受け止めてきたのか。指導の藤森研文学部教授に寄稿していただいた。

藤森 研

文学部人文・ジャーナリズム学科教授



「学生たち、案外やるなあ」。東日本大震災後に、見直している。

第一は、ボランティア活動への積極的な参加姿勢だ。昨春秋、石巻市の知人から「専修大生に傾聴ボランティアに来てもらえないだろうか」と相談され、授業で呼びかけたら、十数人の学生が手を挙げ



▶ 震災報道の調査・分析をした学生たち。中央奥が藤森教授

各紙の「被災者の声」6千人分析

た。学内にはほかに多くの呼びかけをした。その結果ボランティア活動があると思10人以上が新たに加わり、登月の「ふれあい」の際に訪れうが、石巻の仮設住宅を訪問録メンバはいま文学部人文た大川小跡では、横なぐりのする我々の小さな活動も、始・ジャーナリズム学科を中心雪の中、みな寡黙になった。めてから間もなく1年になに、1〜3年次生の男女総勢2年次生の女子は「3月にる。学生たちは「ふれあい」約40人に膨らんだ。そもそも見れた被災地でのテニスが印象ロジエクト」と呼んでいる。が有志の集まりで、参加にはに残っている」と答えた。津傾聴といっても、石巻の仮何の制限もない。聖心女子大波で無人の荒野と化した被災設団地の集会所に行き、2、生3人が加わったこともあ地の片隅のコートを復旧し、3日間、おばあちゃんやおじる。無理はせずに行ける人がある日、男女数人がテニスにいちちゃんとお茶を飲んでお喋り行く、という原則も自ずと出興じていた。震災後の石巻でりしたり、集まって来る子ども来た。

「人間同士」深い共感



▶ 学生たちがお年寄りや子どもたちと交流する「ふれあい傾聴活動」11月2日、石巻の仮設団地の集会所で

「集団生活笑くれた。これにより作業は実いが大事、泣にはかどった。くのは布団かぶってから」(65歳女性) 今年の調査で「発見」もあ(2011・) った。男女3人のゼミ生は、4・7河北新 全国46の新聞が、原子力発電報) ↓ つの将来に関して社説でどんならくても皆の主張をしてくるかを調べた。前では気丈に結果は「脱原発」が28紙、「減振る舞おうと原発」が14紙、「原発維持」する姿を思いが2紙、「方向性を示さない浮かべ涙が出る」が2紙だった。3・11た。 矢印の後に 余りが「脱原発」に舵を切っ付された調査 学生たちの寸 言が、深い共 感を物語る。 は、朝日新聞でニュースとし 私は作業量と て報じられた。 成果を計算高 った。関連社説をすべて読み 込み、微妙な表現の社説は皆 を恥じた。彼女ら学生は6千 の声一つひとつを人間同士と して受け止めていた。それら を報告書の形で全国のメデイ アや後世に伝えたいと願い、 だから徹夜の作業も辞さなかつたのだと、ようやく思い至 った。

追われる坂道で人をひいて逃 含め皆で雑魚寝し、朝は買い げたトラックもいたのよ」と、頬を震わせながら胸のつかえを語った婦人もいた。

「普通の大學生生活を返してほしい」(19歳女性) (2011年) 今年の調査で最もエネルギーを使ったのは、各新聞に掲載された「被災者の声」の分析だった。「膨大な作業にな心が痛んだ。

図 全国46紙の原発社説の分布

「脱原発」	28/46 (60.9%)
「減原発」	14/46 (30.4%)
「原発維持」	2/46 (4.3%)
「方向性を示さないもの」	2/46 (4.3%)

で議論して、一つひとつ分類する。学生たちは正確を期して最後まで粘り腰を見せた。一度決めた分類に疑義が生じると、学生の呼びかけで議論し